

平成 30 年 5 月 6 日実施

「東京都 I 類 B」
(心理区分)

心理学

【解答例】

～平成 30 年度 東京都 I 類 B 心理 一次専門記述 解答例～

[1] 統合失調症に関する次の問いに答えよ。

(1) 統合失調症の発症率、陽性症状及び陰性症状について、それぞれ説明せよ。

統合失調症の発症率は、人口の約 0.7～1.0%とされ、性差はほとんどなく、国による違いは少ない。その症状は、主として陽性症状、陰性症状に分けられる。陽性症状とは、幻覚や妄想、思考障害、これらに伴う行動の異常が挙げられる。たとえば、誰かに命を狙われていると思ひ込み、衝動的に行動する、話のまとまりがなくなったりするなどである。一方で陰性症状とは、感情の平板化、意欲の低下、思考力の低下が挙げられる。たとえば、喜怒哀楽の感情がほとんどなくなり、他人とのコミュニケーションがとれなくなるなどである。

ただし、陽性症状、陰性症状という二分類は単純すぎるという批判がなされ、今日では、当事者の症状のパターンの分析から、①精神運動貧困型(発話の貧困さ、感情の平板化、自発的行動の現象)、②解体型(思考形式の障害、不適切な感情)、③現実歪曲型(妄想、幻覚)の三分類が統計的に信頼性が高く、臨床的にも妥当だとされている。

(2) シュナイダーの一級症状について説明せよ。

シュナイダーは、臨床診断的観点から、統合失調症の状態像に焦点を当て、一級症状を提唱した。一級症状とは、①考想化声、すなわち、自分の考えが他者の声で聞こえてくる体験、②話しかけと応答の形の幻聴、③自己の行為に随伴して口出しをする形の幻聴、④身体への影響体験、⑤考想奪取やその他思考領域での影響体験、⑥考想伝播、⑦妄想知覚、⑧感情や衝動や意志の領域に現れるその他の「させられ体験」、影響体験、である。シュナイダーの一級症状は、幻覚・妄想・自我障害を中心とした症状であり、(1)で述べた、陽性症状がほぼこれに相当するといえる。

(3) 治療及び援助について、それぞれ説明せよ。

統合失調症の介入に際しては、治療としては①薬物療法、②心理療法、さらに援助として③社会的・地域的介入が行われる。

①薬物療法： 統合失調症には薬物療法は必要不可欠である。特に、陽性症状に対しては、ドーパミンの活動を抑える薬が有効である。陰性症状に対しては薬物療法が効果的という証拠はない。②心理療法： 統合失調症に対する心理療法は、症状そのものをなくすることが目的ではなく、症状によって生じる苦痛を減らすために行われる。近年は、統合失調症による妄想や幻聴に伴う苦痛を和らげる対処法として、認知行動療法が効果的であることが指摘されている。③社会的・地域的介入： 当事者の予後の改善と社会復帰を目的として、薬物療法や心理療法と組み合わせて用いられる。具体的には、ソーシャル・スキル・トレーニング(SST)や、通所施設でのデイケアなどのリハビリテーション活動、職業リハビリテーションなどが挙げられる。SST では、当事者の対人的コミュニケーションに改善する働きかけやトレーニングを行い、デイケアや職業リハビリテーションを通じて、当事者を社会的活動に参加するよう促していく。同時に、当事者家族に心理教育を行うことにより、身近で支える家族が統合失調症の特徴、経過、治療を理解するよう支援する。このとき、家族が、統合失調症の再発の兆候となる心理的变化や行動変化を学び、再発に備えることで、再発を防ぐことにつなげていける。(1261 字)

引用文献：心理臨床大事典 培風館、丹野他 臨床心理学 有斐閣、酒井明夫 こころの科学の誕生 日本評論社

※注：この解答は少し長い。(1)の二段落目は削除し、(3)も家族支援のところはもう少し簡潔にすれば、ちょうどよい長さになるであろう。

[2] SL 理論におけるリーダーシップについて説明せよ。

[解答例] :

SL 理論とは、状況的リーダーシップ理論のことであり、ハーシーとブランチャードのライフ・サイクル理論がこれにあたる。ライフ・サイクル理論では、メンバーの成熟度によって効果的なリーダーシップが変わると考える。

ハーシーらは、リーダーシップを定番の関係志向性と課題志向性の二つの軸でとらえ、それぞれの高低の組合せで、教示型(関係低・課題高)、説得型(関係高・課題高)、参加型(関係高・課題低)、委譲型(関係低・課題低)の4つに分けた。メンバーの成熟度は、心理的成熟度と職務成熟度の両者から捉えた。

この理論によれば、メンバーの成熟度が高まるにつれ、効果的なリーダーシップは、リーダーがメンバーへの指示的行動を中心に課題遂行を促す教示型から、メンバーへの配慮を増やし指示的行動を徐々に控えていく説得型、メンバーへの配慮を徐々に控え、指示をさらに控える参加型を経て、メンバーへの配慮も指示もどちらも抑えてメンバーに任せる委譲型へと移行する。(430 字)

[3] 記憶の変容に関して、カーマイケルらが行った実験とバートレットが行った実験についてそれぞれ説明した上で、それらの実験からいえる、記憶の変容に関する特徴について述べよ。

[解答例] :

カーマイケルらは、実験参加者に、あいまいな図形に二通りの異なる言語ラベルを提示して記憶させ、再生される図形がどのように変化するかを調べた。たとえば、二つの正円の間に横棒が引いてある図形について、「メガネ」というラベルを与え、「この図形はメガネに似ている」と記銘させた場合は、再生される図形は元の図形よりもメガネに似た形で再生され、同じ図形について「鉄アレイ」というラベルを与えた場合、鉄アレイに似た形で再生された。つまり、記銘の手がかりとして言語ラベルを用いることで、その言語のラベルの内容に合うように、記憶が変容した。

バートレットは、フクロウに似た絵文字を、実験参加者の一人に提示して再生してもらい、その再生された絵を次の参加者に提示し、それをまた再生させるという方法で、リレー再生をさせた。その結果、フクロウに似た絵は、最終的にクロネコになった。つまり、参加者が提示された絵をそのまま記銘し再生するのではなく、記銘の際に自分のスキーマを用い、そのスキーマに基づいて再生したために、記憶の変容が見られた。

これら二つの実験から、記憶の変容が起こるのは、人は記銘の際に個人が持つ知識を手がかりとしたり、既存知識であるスキーマを利用し、再生時はその知識やスキーマに基づいて記憶を再構成するためであることが明らかにされた。(557 字)

[4] フロイトが説いた発達段階について説明せよ。

[解答例] :

フロイトは、性本能をいくつかの部分衝動に分類し、それらが精神発達と強く関係することに注目した。そして精神-性的な発達を次の5段階にまとめた。

①口唇期： 生後1歳半頃までの時期であり、乳を吸う活動を通して口唇粘膜の快感を得る。この段階における養育者との関係から、基本的信頼感を形成する。

②肛門期： 生後8か月～3、4歳頃までの、排泄のしつけがなされる時期である。排泄などを通じて、身体の中から外へ出すことに伴う快感を得る。排泄の調整を通して自己コントロールを学ぶ。

③男根期(エディプス期)： 3, 4 歳～6, 7 歳の時期。異性の親に対する性的愛着, 同性の親に対するライバル意識を抱く時期であり, これはエディプス・コンプレックスとも呼ばれる。男児が父親に敵意を抱くことへの罪悪感から去勢不安を生じる。やがて同性の親へのライバル視をやめて, モデルとして同一視するようになることで, 男らしさ, 女らしさを身につける。

④潜伏期： 児童期にあたる。関心が勉学や遊びに向くことで, 性的衝動は一時的に潜伏する。人間関係が, 外部に拡大していく。同性中心の交友関係を通じ, 男らしさ, 女らしさが強化される。

⑤性器期： 思春期から成年期にあたる, 身体的成熟が急激に進む時期である。他者との比較や理想の自己と現実の自己とのギャップを意識しながら, 主体的な自己を形成する。異性との間に相互的で親密な関係をつくらうとする。

フロイトの発達段階の理論は, 実証性に乏しく妥当性の検討も十分に行われていないが, その後のエリクソン等の生涯発達理論をはじめとして心理学や精神医学に幅広く影響を与えた。(671 字)

引用文献： 詫摩他 性格心理学への招待 サイエンス社

[5] 交流分析における三つの自我状態についてそれぞれ説明した上で, 自我状態の機能の特徴について説明せよ。

[解答例]：

交流分析とは, エリック・バーンが創案した理論体系であり, 心理療法である。自我状態は, 交流分析における基本となる概念であり, 個人が生まれてから経験したすべての知覚, 感情等を反映していると考えられている。

自我状態は次の三つに分けられる。①P(ペアレント)：父親や母親など自分を育ててくれた人たちの行動や感情を取り入れた自我状態である。②A(アダルト)：個人の中で物事を冷静に判断して行動する「コンピューターのような」自我状態, ③C(チャイルド)：個人の幼少期と同じように, 今ここで行動したり感じたりする自我状態である。なお, これら三つのうち, P と C は, さらに二つの自我状態に分かれる。P は, CP(批判的な親)とNP(養育的な親)である。C はFC(自由な子ども)とAC(順応した子ども)である。

個人の中では, 上記の三つ, より具体的には五つの自我状態が, 常に様々な形で機能している。①P：親のようなことば遣いや考え方, ふるまいを示す。CPは「批判的な親」とも呼ばれるように, 価値判断や倫理観に基づいて, 他者に対して強制的, 支配的, 懲罰的な態度を取る。NPは「養育的な親」とも呼ばれるように, 他者の世話をするように, 保護的, 支持的, 受容的な態度を取る。

②A：「コンピューター」に譬えられるように, 「今, ここ」で最も適切な解答を探し出そうとするような, 感情に支配されず, 冷静で論理的な態度を取る。

③C：個人の中にある様々な感情を表現しようとする役割を持つ。FCは, 「自由な子ども」とも呼ばれるように, 喜びをよく表し, よく遊び, 直観力や創造力を働かせる。ACは, 「順応した子ども」とも呼ばれるように, 親のしつけに対して順応しようとしている子どもの感情表現であり, 相手の期待に合わせて妥協したり, 相手の態度に対して拗ねたり, うらんだりして反抗するなどの態度を取る。(774 字)

引用文献： 杉田峰康 新しい交流分析の実際 創元社

(文責：高橋美保)